

【 復活讃詞 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきよりくだり、みっかの
 恵 深 主 爾 高 降 三 日

ほうむりをうけて、われらをくるしみよりときたまえり、
 葬 受 我 等 苦 釋 給 えり、

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こうえいはなんぢにきす。
 我 生 命 復 活 主 光 榮 は 爾 ん ぢ に き 歸 す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよ
 光 榮 父 と 子 聖 神 歸 す、今 も 何 時 も 世 世

に、アミン。

しととひとしくどうぎなるものちゅうじつにしてしんちなる
 使 徒 等 同 座 者 忠 實 に して しん ち なる

ハリストスのえきしゃ、せいなるしんにえらばれたるふえ、ハリストスの
 役 者 聖 神 撰 ば れ た る 笛

あいにもちたるうつわ、わがくにのこうしょうしゃ、
 愛 満 た る 器 我 國 の 光 照 者

あしとしゅきょうせいニコライよ、なんぢのぼくぐんのため、
 亜 使 徒 主 教 聖 爾 の ぼ く ぐ ん の た め、

およびぜんせかいのため、いのちをたもうせいさんやにいのり
 及 全 世 界 の た め に、生 命 を 賜 う せ い さ ん や に い の り

たまえ。

司祭) (黙誦：^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 願う者に智慧と明悟とを興え、罪を行^つう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、
 聖 神 聖 勇 毅 聖 常 生 者

わ れ ら を あ わ れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、
 我 等 憐 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め よ 。 せ い な る
 聖 常 生 者 我 等 憐 聖

か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 神 聖 勇 毅 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。こうえいはちとことせいしんにきす、いまも
 憐 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 いつもよせに、アミン。せいなるじょうせいのもよ、われらを
 何時 世 世 聖 常 生 者 我 等
 あわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 憐 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのもよ、われらをあわれめよ。
 常 生 者 我 等 憐

司祭) (黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 (プロキメン) 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

しゅなんぢらのかみにちかいをなしてつぐなえよ。
 主 爾 等 神 誓 作 償

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、

しゅなんぢらのかみにちかいをなしてつぐなえよ。
 主 爾 等 神 誓 作 償

誦經) 主爾等の神に、



ち かいを な して つぐ な え よ 。
誓 作 償

【 使徒経 (アポストロス) エフェス書 4 章 1~6 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが ^{じん たつ} エフェス人に ^{しよ よみ} 達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて ^き 聴くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{われしゆ} 我主の ^{ため} 爲に ^{めしうど} 囚 ^{もの} たる者は、^{なんぢら} 爾等に ^{もと} 求む、^{なんぢら} 爾等が ^め 召されたる ^{めし} 召に ^{かな} 稱いて ^{おこな} 行

^{およそ} え、^{けんそん} 凡の ^{おんじゅう} 謙遜と ^{ごうにん} 溫柔と ^{もつ} 恒忍とを以て、^{あい} 愛に ^よ 困りて ^{たがい} 互に ^{じょ} 恕せよ、^{つと} 務めて、^{わへい} 和平の ^{つなぎ} 繋

^{もつ} を以て、^{しん} 神の一なるを ^{いつ} 守れ。^{まも} 體は ^{からだ} 一、^{しん} 神は ^{いつ} 一、^{なんぢら} 爾等が ^め 召されたる ^{めし} 召の ^{のぞみ} 望の一なる

^{ごと} が如し、^{しゆ} 主は ^{いつ} 一、^{しん} 信は ^{いつ} 一、^{せんれい} 洗禮は ^{いつ} 一、^{かみばんしゅう} 神萬衆の ^{ちち} 父は ^{いつ} 一なり、^{かれ} 彼は ^{ばんゆう} 萬有の上 ^{うえ} に在り、^あ

^{ばんゆう} 萬有を ^{つらぬ} 貫き、^{われらばんにん} 我等萬人 ^{うち} の中に在り。^あ

(比較用 口語訳)

兄弟たちよ。主にある囚人であるわたしは、あなたがたに勧める。あなたがたが召されたその召しにふさわしく歩き、できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互に忍びあい、平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい。からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである。

司祭) ^{なんぢ} 爾に ^{へいあん} 平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾の ^{しん} 神にも、

【 アリルイヤ 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 來^{きた}りて主^{しゅ}に歌^{うた}い、神^{かみ}我^わが救^{すくい}の防^{かた}固^めに呼^よばん、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 讚^{さん}揚^{よう}を以^{もつ}て其^{その}顔^{かん}ばせ^まえ^えす^すう^うた^たも^もつ^つか^かれ^れよ^よ、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: 人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅ}宰^{さい}よ、我^わが心^{こころ}に神^{かみ}を知^しる智^ち慧^えの浄^いき光^ぎを輝^ひかし、我^わが思^し念^{ねん}

め^めひ^ひら^らき^きて、爾^{なんぢ}が福^{ふく}音^{いん}の教^{おし}え^えを悟^{さと}らしめ給^{たま}え、我^わが衷^{うち}に爾^{なんぢ}の福^{ふく}たる誠^{いましめ}を

おそ^おお^おそれ^{それ}い^いわれ^{われ}ら^らこ^こと^とご^ごと^とに^にく^くた^たい^いよ^よく^くふ^ふお^およ^よなん^{なん}ぢ^ぢよ^よる^るこ^こと^とろ^ろ

を^を思^{おも}い^い且^かつ^つ行^おこ^{こな}な^ない^いて、属^{ぞく}神^{しん}の生^{せい}活^{かつ}を過^すぐる^{いた}を致^{たま}させ給^{けだ}し、蓋^{かみ}ハリス^{ハリス}トス^{トス}神^{かみ}よ、

なん^{なん}ぢ^ぢわ^わたま^{たま}しい^{しい}か^から^らだ^だこ^こう^うし^しょう^うわ^われ^れら^らなん^{なん}ぢ^ぢなん^{なん}ぢ^ぢむ^むげ^げん^んち^ちし^しせい^{せい}し^しぜん^{ぜん}

て^て生^{いの}命^ちを^ほど^どこ^こなん^{なん}ぢ^ぢし^しん^んこ^こう^うえ^えい^いけん^{けん}いま^{いま}いつ^{いつ}よ^よよ^よ

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書10章25~37節 】

司祭) 睿^{えい}智^ち、肅^つみ^つて立^たて聖^{せい}福^{ふく}音^{いん}經^{けい}を聴^きくべし、衆^{しゅう}人^{じん}に平^{へい}安^{あん}、



なん^{なん}ぢ^ぢの^のし^しん^んに^にも^も。

司祭) ル^るカ^か傳^{でん}の聖^{せい}福^{ふく}音^{いん}經^{けい}の^よみ、



し^しゅ^ゅよ^よ、こ^こう^うえ^えい^いは^はなん^{なん}ぢ^ぢに^にき^きし^し、こ^こう^うえ^えい^いは^はなん^{なん}ぢ^ぢに^にき^きす^す。

司祭) 謹^つみ^つて聴^きくべし、

司祭) 彼^かの時^{とき}一^りの律^り法^つ師^しイ^いス^すに就^じきて、彼^かを^ころ^ろに^いし^しわ^われ^れな^なに^なえ^えい^いえ^えん^ん

いの^{いの}ち^ちつ^つが^がん^んか^か。彼^かは^これ^れに^いり^りつ^つぼ^ぼう^うな^なに^しる^るなん^{なん}ぢ^ぢい^いか^かよ^よこ^こた^たえ^えて^い

り^り、爾^{なん}ぢ^ぢこ^ころ^ろつ^つく^くたま^{たま}しい^{しい}つ^つく^くち^ちか^から^らつ^つく^くお^おも^もい^いつ^つく^くし^しゅ^ゅなん^{なん}ぢ^ぢか^かみ^みあ^あい^い

またなんぢ となり あい おのれ ごと これ い なんぢ こた ところただ
 又 爾 の 鄰 を愛すること、己 の如くせよ。イイスス之に謂えり、爾 の答えし 所 正し、
 これ な すなわちい しか かれ おのれ ぎ ほつ い わ となり
 之を爲せ、乃 生きん。然れども彼は 己 を義とせんと欲して、イイススに謂えり、我が 鄰
 とは 誰ぞや。イイスス 答えて曰えり、或 人 イエルサリムよりイェリホンに下る時、盗 賊 に 遇
 えり、彼等其 衣 を剥ぎ、彼に傷つけ、幾 ど死するばかりにして、彼 を捨てて去れり。 適
 一 の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。同じくレヴィトも彼處に至り、近
 づきて彼を見て、過ぎ去れり。惟 或 サマリヤ人は行きて、此に至り、彼を見て 憫 み、就き
 て、其 傷に 油 と酒とを沃ぎて、之を裹み、彼を 己 の家畜に乗せ、旅 館に引き至りて、
 彼を看護せり。明 日行かんとする時、銀二枚を出し、館主に 與えて謂えり、此の人を看
 護せよ、 費 若し此より益さば、我 返る時 爾 に 償 わん。此の三人の中、 爾 孰 を
 盗 賊 に遭いし者の 鄰 と意うか。彼曰えり、此の人に 矜 恤を 施 しし者なり。イイスス 彼
 に謂えり、往きて、 爾 も是くの如く 行 え。

(比較用 口語訳)

ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましようか」。彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたは どう読むか」。彼は答えて言った、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」。彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおりに行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほしいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行って同じようにしなさい」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。
 主 光 榮 爾 歸 光 榮 爾 歸 ず。

(金ロイオアの聖体礼儀 2 へ)